外国語の教授

枡　矢　好　弘

Pike (1957) は，架空の言語を媒介とした外国語習得訓練法を提案している。ある規則体系 (Pike 流にいうなら「パタンの体系」) に，訓練対象者の母国語の単語を当てはめて，Pike が Kalaba-X と名づける架空の言語の文を作り，それを母国語に翻訳し，また，母国語の文を Kalaba-X 語に翻訳するというものである。翻訳は相当複雑な作業となるが，その内容は省略する。

これは，もともと，宣教師が未知の言語を話している任地に赴いた時，自力でその地の言語を習得して任地での生活と布教を可能にし，聖書の翻訳にたずさわる能力を養うことを目的としたものであって，目標言語が定められている外国語学習にただちに適用できるものではない。しかし，この訓練法の眼目である　i）目標言語の統語構造の発見，ii）その習得，iii) 二つの言語間の統語構造の転換のうち，ii）と iii）は外国語学習に一つのヒントを与えてくれる。

目標言語の統語構造，平たく言えば，「文型」の習得には，特に初心者にこの方法が応用できる。目標言語が英語であるとしよう。英語のテキストを与え，知らない単語は全部日本語に置き換えてやる。その時，助詞を一緒に与えるか否かといった問題が生じるが，それは，学習者の英語習熟の程度によって判断すべきことであって教師の腕の見せ所となる。これを徹底的にやると文型は自然に身につくはずであるが，一つの点に注意しなければならない。

数年前，筆者はある機関の依頼を受けて，中学一年生に短期間英語を教えていた。開始した時期は，２学期の初めであったと思う。子供向きにしろ自然な英文で書かれたものを与えるために英国で編纂された初級の学習者用の物語を選んだ。当然，学校ではまだ習っていない（過去）進行形や現在完了も出てくるが，これは，日本語の与え方次第でなんら問題にならない。生徒の反応はよく授業は快適なテンポで進行していた。

ジョンという青年が，山歩きの途中道に迷い，日が暮れて，蜘蛛の化身である美女の住む館に迷い込む。かろうじて蜘蛛の魔手を逃れてめでたしめでたしとなるのだが，道に迷ったとき青年は，頂上に出て再び行くべき道を探そうとする。頂上から見下ろすと，一つの灯火が目に入る。“Light means a house.” それまで快調に翻訳を続けていた生徒たちがここで戸惑いを見せた。light が主語なのか，house が主語なのか分からなくなったのだ。明らかに日本語の論理形式の干渉が起こっている。「明かりが家を意味する」という言い方は普通の日本語にはない。このような戸惑いの克服が文型の体得につながることになるが，日英両語の主語の違いは，現在の学校文法が教える程度では不十分である。

Pike が「翻訳理論」と呼ぶこの方法を応用するとき，単純な文型で構成された文の多くは日本語の論理形式の規則で読めるということを教授者は念頭に置く必要がある。同時に学習者の多くが英文（あるいは，その他の外国語の文）を読みながら，実は日本語の論理形式の規則を援用しているに過ぎないという事実にだまされないようにしなければならない。日本語の論理形式の規則を頼りに外国語の文を読んでいてはいつまで経ってもその外国語は身につかない。

ここで，音声面に目を転じることにしよう。Brown (1977 p. 4) に Ready at last ! 's go then.（やっと用意ができた。それでは出かけよう）という例が出ている。's は言うまでもなく Let's である。市販されているほとんどの音声教材には，おそらくこのような発音は出てこない。調音は注意深く正確であり，音声は明晰である。このようなスタイルを Brown は slow colloquial と呼ぶ。slow colloquial というのは，アイロニーであって，実際の colloquial には程遠い，これ以上ないというほど formal な発音様式である。ところが多くの英語教師が，この slow colloquial を速くしたのが普通の日常の発音であると信じている。それでは英国にやってきたとき日常耳にする英語にはついていけないと Brown は説く。

日常英語では，[ˈækʃl̩ɪ], [ˈækʃlɪ] (actually)；[ˈslɪstə] (solicitor) のような発音はしばしば耳にされる。前二者は Wells (1990) に記載されているが，後者を記載した辞書を筆者は知らない。いずれもイングランドの標準発音であり，後者は，故 David Abercrombie 教授が，「私はしばしばこう発音する」と言われていたものである (personal communication)。ただし，[sl̩ˈɪstə] は Jones-Gimson (1977[14]) にある。このような発音を筆者は「草書体発音」(cursive pronunciation) と呼ぶが，日常英語を習得するためには，この草書体発音を覚える必要がある。だが，どのような草書体発音が存在するのか，十分なデータは今のところない。その調査は，学術的にも英語教育のためにも急を要する問題である。

草書体発音の中には，おそらく臨時のものと思われるものがある。筆者がヒヤリングの時間に使用しているビデオに，William [ˈwɪʎɪm] というのがあった。しかし，母語話者はこれを [ˈwɪljəm] と聞いているはずである。また，[ˈhaʊ kəm・ē naʊ so ˈdɪfrənt] (how come they're now so different) というのもある。now を [naʊ] と表記するのは必ずしも正確ではないが，論議の中心点とは関連がないので，そのことには今は触れないでおく。

問題は，they're の部分が [ē] だけで片づけられていることにある。直前の [m] が Catford (1988) のいう離接接続 (open transition —[・] で表記) をなすので，続く [ð] の脱落は（無自覚的ではあっても）意図的なものであろう (cf. [ˈhɑf・fɛə] half a fare [Catford])。

they の核音は be 動詞の脱落によって続く [n] の影響で鼻音化を起こしている。したがって，[ə] の脱落は，録音性能の問題ではない。発音されなかったのである。統語上不可欠な be 動詞の脱落を理解するためには，Ladefoged (1975[3] Chap. 11) のいう「音声力学のバランス」(balance between phonetic forces) を知らなければならない。

発話者は，聞き手の聴取を損なわない範囲内で調音に要する努力をなるべく少なくしようとする。したがって，上記のような音の脱落はしばしば起こる。しかし，それが聞き手の側の聴

取努力に過度の負担をかけることになってはコミュニケーションは成り立たない。話し手と聞き手，いずれの側も調音と知覚にかかる負担を出来るだけ軽減してなおかつコミュニケーションを損なわないように調音・知覚努力の均衡を保つのが「音声力学のバランス」である。

上記の how come they're now so different が，あのように発音されて，どうして音声力学のバランスが保たれるのであろうか。聞き手は，how come と来れば，後に続くのは文であることを知っている。脳は後続の語の確率を計算しながら，先を予測する。まず予測される次の語は主語である。音声情報から判断して内容語ではありえない。とすれば，come に続く語は文法語の弱形（あるいは，弱形に相当する形）でなければならない。核音に [e] をもつ弱形（または，その相当形）は they である。they に続くものとして，are は脳の中で，確率の上から，相当上位に位置づけられているはずである。they . . . now so different の欠落部分を補うことは決して困難なことではない。

Fry (1977) によれば，英語の場合，大ざっぱな言い方をするなら，約5割の音声情報があれば，残りはかなりうまく推測できる。つまり，飛び飛びに音を聞くのである。上掲例の they're のところは，聞き手は完全に飛ばしているのかも分からない。つまり，how come . . . now so different だけを聞いて，how come they're so different という文を構築しているのかも知れない。聞き手は，話し手が言う全てを聞いているのではなく，音声情報を飛び飛びに聞きながら，それを手掛かりにして自分で文を作っているのである。誤解のないように言っておくが，一部で行われている訓練方法のように，ある周波数帯をカットしているのではない。書かれた文でたとえるなら，文字を一つ飛ばしに印刷したような状態で話し手の言葉を聞いているのである。極端な表現になるが，聞き手は話し手が発する音声情報を手掛かりに自分で文を作っているということになる。だから，時にはとんでもない聞き違いが起こる。

言葉を聞くという行為が，文を作ることであるなら，自分で作れない文は聞いても分からないし，知らない表現はどんなに正確に聞いても理解できないということになる。ヒヤリングの訓練は，ただ発話を聞かせるだけでなく，読解や特殊な作文の練習と並行させなければならない。特殊な作文というのは，部分的な情報が与えられた文を意味を推測させながら完成させるというようなことになるであろう。もちろん，音声情報に慣れることも必要である。もう一度上にあげた例を引くなら，how come の次の they が極端に短いこと，'re は発音されていないことに学習者の注意を喚起する必要があろう。音声学の訓練ではないのだから，上に述べた詳細を教える必要はないし，[nau] が実際は [naʌ] となっているというようなことを言って学習者を不必要に混乱させることは避けねばならない。

ヒヤリング教材にしばしば見られる，発話を聞きながらテキストの空白を埋めるという作業は，練習の効率を落とす恐れがある。文字は視覚情報として脳の視覚中枢で処理される。言語音は聴神経から脳に送られて聴覚中枢で処理される。脳は，同時に二つの作業を行わなければならない。聞かせるときは，絶対にテキストを見せてはならない。テキストの内容を，学習者に無理のない程度の分量に区切って記憶させ（暗唱できるほど正確にというのではない，漠然と頭に入っていれば十分である），その後でその部分を聞くというのが賢明な方法であろう。

オラル・メソッドを高く評価する人がいる。私は反対である。何十年も前のことであるから，具体的なことは定かでないが，ミャンマかどこかの国の，オラル・メソッドで学習した，子供が書いたという日本語の文章を読んだことがある。支離滅裂に近いものであった。「オラル・メソッドの欠陥が現れていますね」というようなことを，今は故人となられた恩師大塚高信博士と話し合ったのを覚えている。具体的なことは差し控えるが，オラル・メソッドで育った人が日本語に十分な翻訳ができないという例も私は知っている。それも，上記のような子供の話ではない。有能な成人の場合である。難解な論文が読め，きちんとした文の書ける人が，翻訳でつまずくというのはどういうことなのであろうか。きちんとした母語にできないということは，原文の把握に不十分なところがあるからではないか。

最後に付け加えておきたいことがある。これもよく言われることだが，乳幼児は耳から聞くだけで母語を習得するのだから，外国語学習も同様にすればよいという意見がある。Chomsky 流に考えるなら，人間は生得的に言語というものを知っていて，母語に特有のパラメータだけを習得すればよい。しかし，幼児が，母語のパラメータを習得し終わり，これを生得能力としてもっていた言語構造の知識と組み合わせたとき，母語にないパラメータは大脳から排除されている，ということを忘れてはならない。

言語が生得能力であるという考えの根拠は，赤ん坊は，周囲で話されている母語を聞きながら習得していくのだが，自分の回りで話されている言葉は，言い間違い・言い換え・訂正・繰り返しなどを含む不完全な文である。そのような不十分な資料をもとにして完全な文法が習得されるのは，言語構造を生得能力として知っているからだという点にある。これに対して，不十分な資料から完全に母語を習得するのは，脳の処理能力によるのだとする意見もあると聞く。学習能力をもったコンピューターのことを考えると，尤もな意見のようにも思われる。後者の立場に立つとしても，子供が母語を習得したとき，大脳はもはやかつての処理能力を失っているであろう。

さらに，赤ん坊や幼児には，常に母語を習得するための動機がある。母親や身近にいる人に訴えたいことがある。泣き始めたときからすでに母語使用のための準備は始まっている。喃語期は発音練習の時期である。母語の発音練習ではない。音声器官を動かし音を出す練習である。このとき習得した音声器官の運動の一部が将来母語を発するための筋肉運動となる。やがて身近の人の発話を断片的にしろ理解し始めると，一部の言語音を識別する手掛かりを習得するようになる。そして，その手掛かりを自分も利用しようとする。まず単純なものから始めるのだが，ここに赤ちゃん言葉の始まりが聞かれる。

母語習得に要する期間は，一生という時間から見れば短期間ではあるが，ほとんど母語の習得と心身の発育のためにだけ使用される5年間は決して短い時間ではない。自分の欲求を身近の人に訴えたいという強い動機に裏づけられて十分な時間をもって行われ，しかも，大脳の受け入れ態勢も異なる母語の習得と，成人の外国語学習は同一次元で論じられるものではないのである。

参 考 文 献

Brend, Ruth M., ed. 1972. *Kenneth L. Pike.* Selected Writings. To Commemorate the 60th Birthday of Kenneth L. Pike. The Hague, Paris : Mouton.

Brown, Gillian. 1977. *Listening to Spoken English.* London : Longman Group Ltd.

Catford, J. C. 1988. *A Practical Introduction to Phonetics.* Oxford : Clarendon Press.

Fry, D. B. 1977. *Homo Loquens—Man as a Talking Animal.* London : Cambridge University Press.

Jones-Gimson. 1977[14]. Daniel Jones, *Everyman's English Pronouncing Dictionary.* Extensively revised and edited by A. C. Gimson. London : J. M. Dent & Sons, Ltd. ; New York : E. P. Dutton & Co., Inc.

Ladefoged, Peter. 1975[3]. *A Course in Phonetics.* Fort Worth, Philadelphia, San Diego, New York, Orlando, Austin, San Antonio, Toronto, Montreal, London, Sydney, Tokyo : Harcourt Brace Jovanovich College Publishers.

Pike, Kenneth L. 1957. "Language and life : a training device for translation theory and practice", *Biblioteca Sacra*, 114, 347-362. Reproduced in Brend (1972), pp. 117-128.

Wells, J. C. 1990. *Longman Pronouncing Dictionary.* Harlow, Essex : Longman Group UK Limited.